



Title	生徒は何を考えるのか
Author(s)	川田, 有希
Citation	臨床哲学のメチエ. 2011, 17, p. 25-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6443
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

生徒は何を考えるのか

川田 有希

私が洛星高校での活動に本格的に携わるようになったのは今年からで、授業を訪れたことはまだ二回しかない。なので、実際の授業で起こっている出来事を語るのは他のメンバーにお任せして、ここでは高校で対話技法の授業を行うことにどのような意味があるのかを私なりに考えていきたいと思う。

とはいっても、今年度の活動にあたり授業をすることによる明確なねらいが初めから定められていたわけではなく、「生徒に、様々な問いを自分のものとして考えることができるようになってほしい」という目標が漠然とあるだけだった。問いを自分のものとして考えるというのは、誰かの受け売りや一般論によって答えを出すのではなく、自分自身で本気で考えるということである。どうして対話技法の授業でそれが可能になるのか。また、生徒達は何を自分自身で考えるのか。

この授業で強く興味を引かれたものの一つが「あだ名」制度だった。対話技法の授業中、生徒は自分で決めたあだ名の書かれた名札を身につけ、それでお互いを呼び合う。初めのうち、私

はこの制度を単に話しやすい雰囲気を出すためだけのものだと思っていた。しかし、あだ名を使って対話を行うのには別の意味もあるのだと、昨年度以前から活動していたメンバーに教わった。本名で授業を行う場合、生徒の日常的な人間関係などが対話に直接影響を及ぼす恐れがある。あだ名制度はそのような事態を回避するための配慮でもあったのだ。あだ名で呼ばれることにより、生徒は普段の自分と少し距離を置いて物事を考えることができるようになるのだという。しかし、ここで疑問が湧いた。問いを自分のものとして、自分自身で考えるというのが、この授業での目標だった。自分と距離を置いた状態で、果たして自分自身で考えることは可能なのか。生徒はどのようにして自分と距離を置き、何を自分自身で考えるというのか。



私の結論から言うと、自分から距離を置いて考えることと、問いを自分自身で考えることとは少しも矛盾しない。更に言えば、普段の自分から少し離れて考えることによって初めて見えてくるものが少なからずあると、私は思うのである。

対話技法の授業の中で生徒が距離を置く「自分」というのは、自分の全てではなく、普段自分がぼんやりと抱えている直感や感情といったものではないだろうか。私は高校生の頃実に多くのことを思ったり感じたりしたものが、その直感から一步離れて、ではなぜそう思うのか、なぜそう感じるのかと理性を用いて考えたことはあまりなかった。対話技法のワークはそのようなことを考えるのには非常にいい機会ではないだろうか。

授業で行うワークは、単に思ったことや感じたことを話すだけでは成立せず、その理由を説明することが求められる。相互質問法*など進行役の介入が多いワークでは、発言のたびに「それはなぜか?」「それはどういうことか?」と逐一尋ねられるだろう。生徒はただ何となく「このシークワシャージュースは新しい」と思っている、(実際にシークワシャージュースが新しいか否かを話し合うワークがあった)それを発言するときには他人に対

して説得力のある理由と共に言わなければならない。そのためには、シークワシャージュースを新しいと感じている自分と少し距離を置いて、いわば自分の直感や感情を対象化して、考える必要があるのだ。

私はアルバイトの関係上、中学生や高校生と話をする機会が多い。会話をする中でいつも思うのだが、彼らは「楽しい」「可愛い」「つまらない」など自分の感情を表す言葉を非常に多く口にするのだ。それはとても良いことだと思うし、人が何かに感銘を受けたときにまず初めに出てくるのはこれらの言葉だと思う。しかし、ときにはそれだけにとどまらず、少し離れたところから「なぜ?」と考えてみるのも良い経験に違いない。感情の塊のような人と、ときどき感情を反省することのできる人とでは、人生の深さが全く違ってくるだろう。

生徒は、ひょっとするとこの授業にとまどっているかもしれない。思いついたことを言う度に、ときに質問され、ときに反論され、「もっと分かりやすく言い直して」と言われることもある。自分と全く違った考えを持つ他者に出会い、価値観が覆される思いをすることもあるかもしれない。そして、そのように考えに考え抜いても、問いに対

する絶対的な答えが見つかることはないのだ。しかし生徒達には是非、とまどいを刺激に変え、対話することや考えることの意味を各々の中に見出してほしい。授業を企画する私達の価値観を覆すような発見をしてほしいと思う。

(かわた ゆうき)

注

***相互質問法：**フランス発祥の哲学対話の技法。詳細は『臨床哲学』第11号や前述の授業内容を参照のこと。

